

八幡さま辺り

高坂 哲也

やくざな父がいて  
日曜の遅い朝

やくざな父がおしゃれして  
八歳の私をうながして

国道<sup>14</sup> 湯涸いにある  
小体な靴屋へ私を連れてったのだ

壁一面にしつえられた幾重もの棚に  
いっぱい足の木型

八幡さまへ通じる参道の鳥居わきには  
公孫樹の黄落がはじまっています

今思えば、息子に見せたい  
男のたしなみ といったところか

胡床すがたに胡麻塩あたまのおじさん  
「できてるよ。注文どおり」

節くれ立つてまつ黒な手  
藍色の前垂れに屋号の染め抜き

鼻をぬける木と川の匂いに  
偉丈夫な父の立すがた

私の顔が映りそうなほど磨かれた  
出来たての黒革靴の光沢

満足顔の父が店のガラス戸を開くと  
ゴトツゴトツ ゴトツゴトツ ゴトツ

京成電車の踏切板を通る音が  
澄んだ空気に 鈍くひびく

歩道橋を渡り、中華『たからや』へ  
「内緒だぞ」と、父

父、ビールと餃子。  
私、わんたんめん。

こんもりと茂った藪知らずのわきを  
私が恐る々々歩いていると

「おまえが生まれた病院だぞ」と  
岳産婦人科を、父が指さす

大股でゆつくり歩く父に手を引かれ  
急ぎ足の私

「はやくでかくなれよ、  
おまえもおれに似てでかくなる」と父

しかし私は大人になっても  
どんなに急ぎ足で歩いても

父には追いつけないのだ